



写真-1 紫合橋から量り岩を撮影（令和元年7月）

■ バラ流しから筏流しへの切替地点・紫合の量り岩

写真-1 は、猪名川に架かる紫合橋（ゆうだばし）から「量（はか）り岩」を撮影したものです。この扁平な大岩は、近世から近代において木材流しが行われる際、水位を知る目印に使われていたそうです。

近世以降、猪名川上流域で伐り出された木材は、猪名川水運を利用して池田村（現・池田市）や戸之内村（現・尼崎市）へ搬出していました。上流から木材を管流し（バラ流し）するのですが、下流の猪名川通船区間では舟にぶつかったりすると危険なので、どこかで乗り手（筏師）によって操作可能な筏流しに切り替える必要があります。そこで紫合の量り岩において、バラ流しにより流れてきた木材を集めて筏を組みます。明治時代初期には、紫合の量り岩はバラ流しから筏流しへの切替地点に指定されていたそうです。

■ 良質な木材の供給地であり、かつ優れた木工集団が居住していた猪名川流域

猪名川町の町域面積 90.33km² のうち約 8 割を占める森林は、古代から良質な木材の供給地でした。

奈良時代以前から猪名川流域には優れた木工技術を持つ木工集団で、渡来系の猪名部^{*1}（いなべ）と呼ばれる人々が住んでいて、その地域を流れる川として猪名川という河川名が付けられたと言われています。木材は楊津（やないづ）と呼ばれていた河の津（港）木津に集積され、猪名川水運を使って下流へ運ばれ、その集団によって加工され朝廷に納められていました。

室町時代になると、かつて「大工」という地名があった槻並（つくなみ：現・猪名川町槻並）に「源三郎」という大工がいたことがわかる史料が現れます。猪名川町唯一の国指定重要文化財「戸隠神社」（猪名川町肝川）の本殿に残された墨書（ぼくしょ）には、大永 4（1524）年の造営に参加した大工数名の中に「おゝいまこ七（大井孫七）」「つくなみの源三郎（槻並の源三郎）」という現町域の村名と人名が見えます。

江戸時代には、六瀬※2（むつせ）の鎌倉村に幕府直轄林「御林」※3（おはやし）があり、多田銀山の用材として、あるいは二条城や大坂城の修復の際など幕府が木材を必要とした時に御林から伐り出したそうです。『延宝検地※4 帳』によると、「松の長大材と雑木、合わせて 1,630 本」という記述が確認されています。御林の管理はきびしく、村人は秋のキノコ採りでも入山を固く禁じられていたそうです。



写真-2 二条城・本丸御殿

※1 猪名部：木工技術をもって大和政権に奉仕した部民（ハのたみ）。『日本書紀』に、「武庫水門（むこのみ）で停泊していた新羅船からの失火によって 500 艘の船を焼いた。そこで新羅王が陳謝して能（よ）き匠者（たくみ）を貢上した。これが猪名部の始祖なり」と記されている。天平 17（745）年 8 月に第 45 代聖武天皇の勅（みことり）で始まった東大寺の建立に、猪名部氏一族から猪名部百世が木工（棟梁）として、飛騨の匠の益田縄手が少工（副棟梁）として動員されている。さらには法隆寺、石山寺、興福寺の建立にも携わった記録が残り、古墳の出土品からは飛鳥寺建立にも携わっていることが知られている。

※2 六瀬：明治 22（1889）年 4 月 1 日、町村制の施行により、木間生（こもお）村・朽原（くちはら）村・木津村・槻並村・万善（まんぜん）村・林田村・笹尾村・清水村・清水東村・仁頂寺（にじょうじ）村・鎌倉村・島村・杉生（すぎお）村・西畑村・柏原村の区域をもって六瀬村が発足。

昭和 30（1955）年 4 月 10 日に中谷村と合併して猪名川町が発足した。

※3 御林：江戸幕府の勘定奉行あるいは御林奉行の管理下にあった幕府直轄の山林（公儀林）で、林業的な観点から設定されるものと、治山・治水・防風・防砂などの観点から設定されるものがあつた。

当初は、城などの木材を確保するために山林の木々を伐採して荒廃させてしまう傾向が強かったが、17 世紀中期の寛文年間を境として、森林資源の確保と恒久的な維持の必要性から、御林の設定が進められるようになった。

※4 延宝検地：東国の幕府領で実施された寛文検地に続いて、延宝 5（1677）年以後に、畿内周辺 8 ヶ国と備中国・陸奥国の一部の幕府領で実施された検地。

延宝検地で創始された検地方法が元禄検地以後の検地方法の範となった。

従来の検地では現地の代官が検地を行っていたが、延宝検地では勘定所派遣の役人の監視下において、検地対象地の周辺にある諸藩が検地の実務を行った。

畿内の代官の多くは、慶長期に軍功のあった在地の土豪や豪商が代官職を世襲して

きた者たちで、勘定所の統制は行き届かなかった。これは、延宝年間後期から続く飢饉の下で、幕府が更なる年貢増徴を貫徹するために現地の民政にあたる代官を検地業務から切り離して、民政とは無関係な外部の人間に新田や隠田の存在を徹底的に追及させることが目的であったとされている。



図-1 猪名川上流域の地図

■ 槻並は匠の村として有名だった

槻並は匠の村として有名で、杣^{※5}（そま）・木挽^{※6}（こびき）に関する古文書が数点残っています。それらによると、上・下阿古谷（あこたに）、民田、万善、槻並の各村と、現大阪府能勢町域の稲地、平野、森上各村とで「槻並組」というグループを作っていたことや、大工頭の京都中井家^{※7}の配下だったことなどが分かっています。

また、享保 7（1722）年には上阿古谷、万善、北田原村が大工高（だいくだか）、杣高（そまだか）などの諸税免除について理由書を代官に提出しています。それによると、大工高・杣高は宮中の作事方（さくじかた：江戸時代、建築・修理などの工事を受け持った下役）を務めることで古来から諸税が免除されているとあります。

※5 杣：古代から中世にかけて律令国家や貴族・寺社などのいわゆる権門勢家が、大規模かつ大量の建設用材を必要とする事業に際して、その用材の伐採地として設置した山林のこと。

※6 木挽：木材を「大鋸」（おが/おおが）を使用して挽き切ること、およびそれを職業とする者。現在の製材、および製材作業で、かつ卓越した木材の鑑定能力をもつ職能集団を指す。

※7 京都中井家：江戸時代を通して幕府の京都大工頭を世襲した家柄で、初代の正清、2代の正侶、3代後見の正純、3代の正知が大和守に任ぜられた。中井家は、上方（五畿内および近江の 6 ヶ国）における公儀作事、すなわち御所、幕府関係の城郭、代表的な寺社などの建築工事を家職としていた。

初代正清は、徳川家康に作事方として仕え二条城建設に活躍した。家康の命による江戸城、知恩院、駿府城の天守、江戸の町割り、増上寺、二条城、内裏、日光東照宮、久能山東照宮、方広寺大仏殿など、徳川家関係の重要な建築を担当した。



写真-3 江戸時代後期の木挽たちの仕事姿
（葛飾北斎『富嶽三十六景』の「遠江山中」）

■ 猪名川では古くから筏流しが行われていた

筏の起源は定かではないものの、元々木材流しは一本流しであったが、周山廃寺（京都市右京区京北にあった古代寺院）の大伽藍建立の際（白鳳時代）、煩わしさもあって木材に穴をあけ木の蔓（つる）で編んで筏を組み、人がその上に乗って棹をあやつる術を覚えた頃から筏の歴史が始まったとされています。



写真-4 『摂津名所図会 巻六〜多田鼓ヶ滝』（『摂津名所図会』から引用・加工）

『住吉大社神代記』（奈良時代前期頃の成立とするも諸説あり）には、「住吉大神が男性の形を借りて現れ、神殿を造る用材を猪名川水運を使って伐り出させた」といった趣旨の記述があり、木津川の名も見えていることから、この頃すでに猪名川で木材流しが行われていて、猪名川町内の木津が木材の集散地であったと考えられています。

また江戸時代、酒樽の材料である樽木は、筏にして大坂から神崎経由で猪名川を上り伊丹で引き上げています。寛政 8（1796）年の「伊丹細見図」には、伊丹雲正坂下の桑津・吹田道沿いに「木場」という地名の記載があります。

図- 4 の絵は寛政 8（1796）年～10（1798）年に刊行された『摂津名所図会』第六巻（川辺郡）に描かれた「多田鼓ヶ滝」の絵です。

絵の中央下部付近には網で漁をする人物が、その下には山道を歩く旅人などが描かれています。また、この場所は、量り岩から下流約 9km の位置にありますが、猪名川では 5 人の筏師が丸太を流している様子も描かれています。（目を凝らして数えてください）

なお、絵の中央部に描かれた旗指山は、かつて源満仲公がこの峯に御旗を靡かせて諸事の機を窺った所とか。今、山をトンネルで抜いて能勢電鉄が走っています。



写真-5 銀橋から旗指山を撮影

『摂津名所図会』の中で、鼓ヶ滝について以下のように説明されています。

鼓ヶ滝 多田川（猪名川）の下流、多田院より八丁（≒870m）ばかり南にあり。左右岩石壁々としてその川幅三間（≒5.4m）ばかり、急流にして珠を飛ばすがごとく白浪濤濤（ぼつけつ：水が地下から湧き出るさま）たり。いにしへは飛泉十丈（≒30m）余落つる。多田院造営の時（970 年）この岩石を斫（は）りて用石とす。または洪水の難を除かん為なり。これより水音絶えて鼓ヶ滝は名のみにして、初夏の頃は年魚（鮎）ここに聚（あつま）る事数万に逮（およ）ぶ。近里の漁者手綱（たも）をもってこれを汲み取る事数斛（こく：10 石≒180 リットル）なり。いはゆる山州宇治川の鮎汲（あゆみ）に比せん。

音にきく 鼓が瀧をうちみれば

川邊二さくや しら百合の花

12 世紀の歌人・西行がこの地を訪れ、斫られた後の鼓ヶ滝の風景を詠みますが、夢枕に土地の古老が現れ、その教えを受けて修正し、この歌を残したと伝えられています。



写真-6 銀橋東の能勢街道沿いに立つ西行歌碑

■ 明治期における筏流しと筏師

明治 10（1877）年、11（1878）年に栄根（さかね）村、東多田村、東畦野（ひがしうねの）村、石道（いしみち）村、一庫（ひとくら）村、火打（ひうち）村、見野村、芋生（いもお）村の 8 ケ村（いずれも現・川西市）から、兵庫県に対し『物産取調書』が提出されています。その中で、松丸太、杉丸太、檜丸太、竹材について、舟が運航されていない上流部では管流し、運航されている下流部では結束して筏を組み、筏師が筏を操りながら猪名川を下ったと思われます。ただ、調書にある筏師の記載は、東多田村の 3 戸、一庫村の 2 戸だけです。

明治 10（1877）年 1 月に国崎村（現・川西市）が作成した「杣木挽炭焼職木材商定則」によると、管流しは西猪名川筋（現・猪名川）では紫合村字量り岩まで、東猪名川筋（現・一庫大路次川）では一庫村大字前川までとされ、それより下流では通船事業に支障を来すため組流し（筏流し）とすべきこととなっています。ただし、現在は猪名川通船が休業しているので、当分は、西猪名川筋は石道村字和田まで、東猪名川筋は東畦野村字トロまで認めること、田方が養生中は、農家の妨害になることを恐れて（猪名川に設置された井堰を保護する観点から）今まで通行を差し止めてきたが、今後は常水より 1 尺 5 寸（≒45cm）以上なら流木を認めること、その時流木で井堰や橋などを傷めた場合にはすぐに関係する村に連絡し、修復は自費で行うことなどが記載されています。

■ モノローグ

猪名川での筏流しは大正末期まで続いていたそうですが、急流部での筏の操作はかなりきつく、足腰に相当負担がかかっていたと思われます。そして、疲労困憊の状態でもた起点まで戻る必要がありますが、まさか徒歩？ 量り岩から戸之内まで筏流しをした場合、帰りの距離は約 25km、疲れた体に鞭打って歩いたとしても 6 時間はかかるはず。それとも戸之内で 1 泊して翌日帰るのかな。冬は寒いから熱燗で冷え切った体を温め、夏はくそ暑いからキンキンに冷えたビールで、おっとこの頃はビールはなかったっけ！ いやいや、ありました。日本で最初に商業的にビールが発売されたのは明治 21 (1888) 年だそうです。

なお、多摩川では、筏師たちが再び上流まで歩いて帰る道筋が両岸に残っており、それを「筏道」と呼んでいたとか。

ヤブカンゾウ（藪萱草）

ツルボラン科・ワスレグサ属の多年草。元来ユリ科に分類されていた。花期は 6～8 月。1 日しか花を咲かせないことから別名「忘れ草」といわれるが、実際は 3 日ほど咲いていることも多い。似た植物に一重咲きのノカンゾウ（野萱草）があるが、ヤブカンゾウは八重咲きである。また、キスゲとも似ているが、花の向きがキスゲは横向き、カンゾウは上向き。量り岩近くの水辺に咲いていた。



写真-7 量り岩近くの水辺に咲いていたヤブカンゾウ

【参考資料】

- 1 『いながわ歴史ウォーク第 7、49、119 話』 猪名川町 HP
<https://www.town.inagawa.lg.jp/soshiki/kyouikuiinkai/kyouikusinnkouka/rekishiwalk/index.html>
- 2 『摂津名所図会』 吉野屋為八企画・秋里籬島編・竹原春朝斎絵 寛政 8～10 年
- 3 『猪名川町史・第 1、2、3 巻』 猪名川町 昭和 62 年、平成元年、平成 2 年
- 4 『大工頭中井家関係資料』 大阪くらしの今昔館 HP 平成 24 年 4 月
https://www.osaka-angenet.jp/konjyakukan/exhibition_special/212012005
- 5 『猪名部、六瀬村、御林、延宝検地、杣、木挽、中井正清、木材流送、多田神社』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 6 『川西歴史今昔』 小田康徳 平成 30 年 1 月
- 7 『筏流し(京都市の祭り) 行事・祭事』
https://opd.opendata-japan.com/facility_and_place_v5s?facility_id=GV-7CL9-NEF1-TZMV
- 8 『地域研究いたみ・第 40 号』 伊丹市立博物館 平成 23 年 3 月
- 9 『2087 時間目～通常更新「湊満」』 ブレイズム漢字講座ブログ 平成 29 年 5 月
<https://luckystarsnake.jp/blog-entry-2141.html>
- 10 『日本のビールの歴史』 キリンホールディングス HP
https://museum.kirinholdings.com/history/nenpyo/bn_03.html
- 11 『筏流しと筏道』 「多摩川の汽水域」 HP
<http://www.tamagawa-kisui.jp/ref/ref-4.html>
- 12 『ヤブカンゾウとは』 GreenSnap 編集部 令和 3 年 7 月
<https://greensnap.jp/article/9793>
- 13 『キスゲとカンゾウの違い』 違い比較辞典
<https://chigai-hikaku.com/?p=26064#:~:text=>

※発行：令和 5 (2023) 年 1 月 『ひょうご水百景』 No.165

改訂：令和 8 (2026) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.165